

翻 訳

ビマル・クリシュナ・マティラル

ことばと世界 (3)

——言語研究におけるインドの貢献——

加 藤 普由子 (訳)

[解題]

本稿は加藤 [2015; 2016] に続く第5章の翻訳であり、「カーラカ」(kāraka) の考え方を概説する。

インドにおけるサンスクリット語文法学の起源は明らかではないが、非常に早い時期から学問の一分野として認識されていたのは確かであり、その価値はパーニニ(紀元前5～4世紀)に負うところが大きい。パーニニの系統に属さない文法学者も存在したが、パーニニの流れをくむ文法学派においては、紀元前3世紀頃のカーティヤヤナ、紀元前2世紀頃のパタンジャリ、5世紀頃のバルトリハリ、11世紀頃のカイヤタ、16世紀頃のバトージ・ディークシタ、そして18世紀のナーゲーシャ・バッタへと一つの大きな流れが連綿と続く(Coward & Raja [1990])。言語としてのサンスクリットの分析はパーニニ文法学なくして不可能である。また、パーニニ文法学は決して古代インドに限定されない。たとえば、バトージ・ディークシタの『シッダーンタカウムディー』では、パーニニの『アシュターディーヤーイー』のストトラがより利用しやすく分類、編集され、取り組みやすくなっている。また、同時代の『ラギーシッダーンタカウムディー』¹⁾は簡約版であり、サンスクリット語文法の入門書として、パンディット²⁾に限らず大学のサンスクリット語講義にも使用されている(Ballantyne [1891]; 高崎 [1959])。このように、パーニニの規則は現在に到るまで意義を持ち続けている。

他方、その価値は西洋の言語学においても認められている。古代インドではすでに言語自体が研究対象として認識され、文法学が独立した学科として出現していた。その後19世紀に西洋においてパーニニとインド文法家の存在に気づき、ようやく歴史文法研究の道が始まったと言われる(マルティネ編 [1972])。ピアルドーはパーニニについて「文法学者はあらゆる意味作用を離れた語に関して操作を行う必要があると強調した最初の人であった」と評する。「文法学派においてこそ、インドの理論は、言語自体に関心を持つという意味で、

西洋の現代の言語理論に接近するよう見える」とも述べる（ビアルドー [1987: 171]）。また、19世紀から20世紀初頭のスイスの言語学者であるフェルディナン・ド・ソシュールは言語の本質を求めて考察するなか、ラングなどの概念定義を示したが、サンスクリット語やサンスクリット文法研究がその探求に貢献したのではないかと想像がふくらむ。彼の博士論文がサンスクリット語の絶対属格の用法に関するものであったのも含め、興味が尽きない。

さて、「カーラカ」の考え方はパーニニ文法学におけるハイライトの一つと称しても過言ではないであろう。では「カーラカ」とは何か。その1つの答えが本章である。マティラルは「行為を完成させる要素」、「行為や動作の実現に役立つ要素」と理解する。他の代表的な重要研究として、たとえば Sharma [2002], Cardona [1976; 1997], 菅沼 [1995], 小川 [1991; 1996], Kudo [1995], 工藤 [1997] が挙げられる。Sharma はサンスクリット表現（文）の意味の中心にはクリヤー（行為）³⁾があるとし、行為の完成には参与者（participants）、すなわちカーラカが要請されると述べる。Cardona は行為への直接参与者（direct participants in actions）をカーラカと説明する。菅沼では、「或る行為を為す者（動作主）」、「或る行為を完成させる者」と説明される。小川は「行為を実現する要素」[1991]、「行為参与者」[1996]と訳出している。工藤では、「カーラカ（kāraḥ）とは行為が達成される場合にその行為を構成する様々な能働者を意味する文法概念である」と説明されている。ただし「行為」という訳語について、パーニニはカーラカを分類するにあたり、生物と非生物との区別をしていないことから、一般的な読者の感覚としては「行為」だけでなく「動作」や「状態の変化」の完成に寄与する要素と説明した方がわかりやすいかもしれない。

文法学派では語句を構成する際の始発点を行為に置き、最も重要な要素は動詞で表現される。他の要素は行為を実現させるものであり、名詞格語尾や動詞語尾で表現される。言語で表現されるもの・ことの世界では、6つのカテゴリーを使って、行為完成への直接寄与者であるカーラカを表す。そしてカーラカは言語表現において文法機能を表す名詞格語尾や動詞語尾に反映される。ただし注意が必要である。カーラカは言語表現において名詞格語尾や動詞語尾で表されるが、その逆に、特定の名詞格語尾はそのまま素直に対応するカーラカを意味するかと言えば、そのように簡単には処理できない。カーラカは意味に基づくと言われるが、対応する言語表現においては動詞の制約を受けて統語上の文法操作が必要となる場合がある。カーラカは意味と統語の両方に関わる。

インドでは古代から今にいたるまで、言語に対する深い洞察が連綿と続く。パーニニによる文法体系の確立は、西洋や東洋に限らず現代においてことばに携わる者に大きな知的興奮を提供してくれる。

本稿においては今まで以上に翻訳が煩雑になる危険性を孕んでいた。そこで、術語に関しては、サンスクリット語の読みのままにしている。すなわち、「行為を完成させる要素」で

はなく「カーラカ」と表している。また、術語を強調しない限り、括弧も外している。カーラカのカテゴリーの役割についても、サンスクリット語表記のままとしているが、必要に応じて、読者の便宜を考えカッコ内に日本語の説明を入れているときがある。読みづらさを最小限にするよう心がけたつもりではある。しかし、「カーラカ」という表現が、概念を表しているのか、言語で表現されるもの・ことの世界での一つ一つの行為完成要素なのか、それとも文法機能なのか。それらの相違を明確にするため、表現や説明が込み入っているかもしれないことをお断りしたい。なお、本文中サンスクリット語で表されている例文を訳す場合、不自然な日本語にならない限りサンスクリット語の語順に従っている。必要に応じて、日本語に対応するサンスクリット語を括弧内に示している。

最後に、翻訳するにあたり、訳出表現や解説において誤った理解をしている場合、訳者の責任であることは述べるまでもない。

第1部 一般的論題

第5章 「カーラカ」理論

I

「カーラカ」の考え方はパーニニ文法体系の中心テーマの1つである。「『カーラカ』説はパーニニの派生体系の基礎である」と説明される (Cardona [1976: 215])。カーラカはパーニニにより定義されていないが、P.1.4.23 *kārake* は表題規則と理解されている⁴⁾。続いて6種類のカーラカが述べられる。アパーダーナ (分離という行為における固定点)⁵⁾、サンブラダーナ (行為の受益者)⁶⁾、カラナ (行為手段)⁷⁾、アディカラナ (行為の基体)⁸⁾、カルマン (行為対象)⁹⁾、カルトゥリ (行為主体)¹⁰⁾である¹¹⁾。アパーダーナとサンブラダーナは西洋文法における奪格と与格に対応すると言えるかもしれない¹²⁾。W. D. Whitney はカーラカのカテゴリーを単なる「格の屈折形」と説明するが (Whitney [1893]; Staal [1972: 165])、私は彼の捉え方を受け入れることを躊躇しているため、最初に対応表現の提示を控えてきた。このような慎重な姿勢を持ちつつ、便宜上、アパーダーナに対しては奪格を、サンブラダーナに対しては与格を適宜使っていく¹³⁾。

名称が示すように、カーラカは行為¹⁴⁾の完成に寄与する諸々の要素である。通常、1つの行為・動作は、たとえば「*patati*」(～が落ちる)のように、1つの動詞形式によって表現される。落下という動作には、少なくとも3つ (あるいは2つ) の要素が求められる。「*vṛkṣāt paṇam bhūmau patati*」(木から一枚の葉が地面に落ちる)の場合、3つの要素が動作の完成に寄与しており、それらは木、葉、そして地面である。パーニニ規則では、それぞれの要素を特定のカーラカクラスに割り当て、前述の文を導き出す。分類は、行為完成に対して、そ

それぞれの要素が果たす役割に基づいていると考えられる。葉は行為主体である。なぜならば行為とは独立した関係にある (P.1.4.54 svatantraḥ kartā。「svatantraḥ」とは「独立している」という意味である)¹⁵⁾。木は「葉が離れていく」「固定の」出发点 (P.1.4.24) であり、アパーダーナと呼ばれる。地面は落ちていく葉の「アダーラ」(基体) (P.1.4.45) であり、アディカラナと呼ばれる¹⁶⁾。同様に、「rājā viprāya sva-hastena dhanam dadāti¹⁷⁾」(王はバラモンに自らの手で富を与える) の表現では、行為主体 (王) の他に、与えられるカルマン (対象である富。P.1.4.49)、サンプラダーナ (受益者・受領者であるバラモン。P.1.4.32)、そして与えるためのカラナ (道具である手。P.1.4.42) が表されている。カーラカの分類は、どの動詞語尾そして名詞格語尾が導入されるかという条件を示すためである。それぞれのカーラカはある程度意味も考慮されているが、サンスクリット語の一般的な統語体系とも関連する。一旦、各項目を分類するためにカーラカのカテゴリーを当てはめれば、このような条件のもとではこのような項目に対して接辞を導入するといった、文法規則を系統立てて説明することが容易になる。たとえば、カルマン (対象) の場合、(特記がない限り) 第2格語尾の1つである「-am」(単数形) で表される。また、カラナ (道具) の場合、第3格語尾の1つである「-tā」(単数形) が付加される。

II

最近では前述したカーラカカテゴリーの細かな関係について異議が唱えられている。言語外の問題であり、論理や観念形成化の問題と主張する者、あるいは純粋に意味論の問題とする考えもある。また、統語論にも関係するとの主張もある。しかし、これらの論争は非生産的と考える (Cardona [1976: 215–24])。まず、パーニニは意味に基づいてカルトゥリ、アディカラナ、カルマンなどのカーラカカテゴリーを定めた。その後、統語などを考慮し、それぞれのカテゴリーの範囲を拡大させる規則をさらに多く作り上げた。たとえば、P.1.4.45では、行為に関連する基体はアディカラナと述べられている。しかし、P.1.4.46¹⁸⁾において、次の条件のもとでは、カルマンと述べられている。すなわち、特定の動詞に特定のウパサルガ (動詞前綴り)¹⁹⁾を付加する条件である (たとえば、「śī」、「sthā」、「ās」に動詞前綴り「adhi」を付加して「adhi-śī」(横たわる)、「adhi-sthā」(立つ)、「adhi-ās」(座る)となる)。

1. grāmam adhiṣṭhāti : (彼は) 村に滞在している。

2. grāme ṭiṣṭhāti : (彼は) 村に滞在している。

事例1の村 (grāma) はカルマンに割り当てられ、事例2ではアディカラナに分類される²⁰⁾。このことから、カルマンやアディカラナのようなカーラカのカテゴリーは、純粋に意味論上の術語として定義されたのではないことが少なくとも分かる。パーニニがサンスクリットという言語を説明する際、自身の説明を容易にするための便宜的手段として、カーラ

カのカテゴリーを導入したのではないかと考える（カーラカのカテゴリーがラテン語あるいは西洋文法の「格」とは厳密に異なるということは明らかである。たとえば、西洋文法の属格はカーラカではない²¹⁾）。具体的には、ある意味の関係を表すとき、どの接辞を導入するかを説明しているのが、カーラカのカテゴリーである。他の様々の要素を含めるためには、意味に基づく狭義のカテゴリーが（パーニニが行ったように）拡大されなければならない、そうでなければ、文法の捉え方は異なっていなければならない。カルトゥリのカテゴリーについても同様な便宜上の計らいにより、感覚生物であるカルトゥリとそうでないものとの区別を無視することになったのかもしれない。人間（たとえば「devadatta」）であろうが斧（paraśu）であろうが、両方共にカルトゥリのカテゴリーであり、同じ分析と派生操作が行われる。

Devadattaḥ vṛkṣaṃ chinatti：デーヴァダッタは木を切る。

Paraśur vṛkṣaṃ chinatti：斧は木を切る。

パーニニとパーニニ学派が「シャブダプラマーナカーハ」²²⁾（シャブダを正しい認識手段と認める人々）であることはよく知られている。パタンジャリは次のように述べる（頻繁に引用されている）。「私たちは『シャブダ』（ことば）の権威を認める。『シャブダ』が『伝える』ことに、私たちは（ものごとを決める際に）依拠する」²³⁾。文学は存在論（あるいは意味論。すなわち、ものやできごと）に主眼をおくのではなく、人々が実際に述べる表現に関わる、とこのように理解する。すなわち、ものやできごとについて人々がどのように表現するかに主眼をおいている。パーニニによるカーラカのカテゴリーは、この考え方にぴったり適合する。故に「sthāli pacati」（大釜が料理する）のような表現方法を簡単に説明することができる。言うまでもなく大釜は料理が行われる土台であり、料理をする行為主体ではない。しかし、哲学的には、大釜は料理という行為に寄与する要素であり、大釜になんらかの作用因を割り当てることは可能である。

カーラカのカテゴリーの本質は統語に関わっているのか、あるいは意味に関係しているのか、この論争については、かなり昔に巻き起こった論理学者（ニヤーヤ学派）と文法学者との間の論争の焼き直しと捉えることもできる。[パーニニ学派が]「シャブダプラマーナカーハ」であるのに対して、ニヤーヤ学派は「アルタプラマーナカーハ」²⁴⁾（アルタ、すなわちものやできごとを正しい認識手段と認める人々）である。ニヤーヤ学派の関心は世界のあり方（あるいは、世界のあるべき姿）にあり、人々が世界をどのように表現するかには特に興味を持っていない。ニヤーヤ学派は人々の言語表現の分析を通して知見を得てはいるが、彼らの関心が意味論、存在論、そして認識に関する問題にあるのは確かである。カーラカのカテゴリーについて、ヴァーツヤヤナ（350年）²⁵⁾は中観派²⁶⁾による論理学者批判に答える際に論じている。論理学者は「プラミティ」（正しい認識）、「プラマートゥリ」（正しい認識

者)、「プラメーヤ」(知られるべき正しい認識対象)、「プラマーナ」(正しい認識手段)を区別するが、中観派はこれを批判した。これらの区別は、文法学者の術語で言うところのようになる。「プラミティ」とは「行為」(動詞の意味)であり、他の3つは3種のカーラカである。すなわち、「プラマトゥリ」は「カルトゥリ」(行為主体)、「プラメーヤ」は「カルマン」(対象)、そして「プラマーナ」は「カラナ」(手段)である。この区別(文法学および論理学の両方で広く普及していた)について、ナーガールジュナ(大乘仏教中観派の始祖)は恣意的と断じた。なぜならば、同じ項目が言語表現により「カルマン」(対象)になったり「カラナ」(手段)となり得るからである。さて、ヴァーツヤーヤナはこれを受けて、根本的なカーラカの種類はものに存在する性質(力)に基づいており、ものには数々の力があり得ると応えた。言い換えるなら、カーラカの種類は諸々のものの分類ではなく、ものに存在する諸々の力の分類である。『ニヤーヤ・スートラ』2.1.16からヴァーツヤーヤナの言葉を以下に引用する。

(すべての)カーラカの術語²⁷⁾は何らかの理由が発生することで適用される。たとえば、「(そこに)木が立っている」の場合、木は行為主体である。なぜならば、立つという行為に関して木には「非依存性・独立性」(P.1.4.54)がある。「(彼が)木を見る・見ている」の場合、木は(行為主体により)見られるという行為を通して「実に望まれている」ので、木はカルマン(対象)である。「(彼は)木の傍にある月をさししめす」では、木は月を見せるための「主要な道具」であるが故に、木はカラナ(主要な道具)である。「(彼は)木に水をやる」の場合、木は散水という行為の「恩恵を受けるもの」であるから、木は恩恵を受けるものあるいはサンプラダーナ(受益者)である。「葉が木から落ちる」では、木は離脱が意図されている時の動かぬ点だから、木はアパーダーナ(固定の出发点)である。「カラスが木に住んでいる」の場合、木は住むという「行為」に関しての土台だから、木はアディカラナ(基体)である²⁸⁾。このように、カーラカとはものそのものでもなければ、行為そのものでもない。では、カーラカとは何か。ものが行為に寄与するとき、あるいは特定の機能的活動をするとき、ものはカーラカになる。行為から独立しているものがカルトゥリ(行為主体)であり、ものそのものでもなければ、行為そのものでもない。(カルトゥリによって)最も望まれるものがカルマン(対象)であり、ものそのものでもなければ、行為そのものでもない。その他カラナ(手段)等、このように説明されるのがもっとも適切である。諸々のカーラカのカテゴリーはこのように適用される。カーラカのカテゴリーは、ものそのものに対して、行為そのものに対して適用されない。では何に対してか。ものが行為に寄与するとき、そして特定の機能的活動をするとき、ものそのものに対して適用される。

ヴァーツヤーヤナは明らかに「一次的」意味における6種のカーラカカテゴリーを述べた6つの主要な規則に言及しているが、「拡大された」あるいは「二次的」意味に関しては無視している²⁹⁾。これらの主要規則では、カーラカカテゴリーの意味上の基準が最も重視されている。しかし、前述したように、パーニニによるカーラカカテゴリーの適用には他の要素も考慮されている。たとえば、動詞語根に特定のウパサルガ（動詞前綴り）を付加すると、アディカラナ（基体）からカルマン（対象）に変わる（P.1.4.46³⁰⁾）。この場合、パーニニ学派によれば、同じ「村」（IIの事例1と2を参照）にはアディカラナとカルマンの両方を顕現させる力がある。2の事例では〔行為に関連した〕アディカラナであり、1の事例ではカルマンである。付帯条件（この場合は、特定のウパサルガの存在）によって、いずれの力が支配的になるかが決定する。ここでの教訓は、言語使用が文法理論を決定づけるべきであり、意味が決定づけるのではない。パタンジャリの「シャブダプラマナーカーハ」の考えがここで再び正当化される。

III

カーラカの「本質」について、すなわち『カーラカ』とは何かの問いにパーニニは明確に答えていない。パタンジャリはP.1.4.23³¹⁾を次のように注釈し、その具体的な使用法の理解に役立たせた。「行為を実行するもの、それは行為を成就させる」（karoti kriyām nirvartayati）と説明される。したがってカーラカは実行者（a do-er）であり、行為者（an actor）であり、それ故に行為への関与者（a participant）である。しかしながら曖昧である。文法学と論理学の伝統では広く、カーラカは一般的に次のように理解されるべきと述べられる。1つは「クリヤーニミッタ」（kriyānimitta）、もう1つは「クリヤーヌヴァイン」（kriyānvayin）である。前者は動詞で表現される行為（クリヤー）の原因となる要素（ニミッタ）であり、後者は動詞で表現される行為と統語上繋がる要素（アヌヴァイン）である。いずれの定義も「クリヤー」という語の曖昧さを利用している。クリヤーは行為（あるいは少なくとも動詞の意味）を表しているとも、あるいは単に動詞の形式、統語上の表現形式を表しているとも捉えられる。考えるに、前者の定義は意味、すなわち行為に依存している。後者の定義は動詞の形式に依存している。もしこの理解が正しければ、この2つの定義のうち前者には意味論的含意があり、後者には統語論的含意があると言えよう。さらに微妙な点がある。クリヤーには術語としての顔がある。つまり、ダートゥ（語根）の意味である行為が暗示される。ところが、ダートゥの中には実体を表すものがある。ダートゥとは、パーニニ文法に付属している『ダートゥパータ³²⁾』のダートゥ（dhātu）リストにある項目である。さて、リスト内のダートゥの中には行為ではなく実体を表すものがある。たとえば、「gaḍi」は「顔の一部」を意味する。「gaṇḍati kapolam³³⁾」は動詞と名詞から構成される文だが、「頬

とは顔の一部と一致するものである」と理解される。「gaṇḍati」は動詞を示しているが、元来は行為ではなく実体（顔の一部）を表す。しかし、このような項目はクリヤーと呼ばれるべきである³⁴⁾。したがって類はクリヤーに寄与するカーラカである。ここで、このサンスクリット語の例文には同一性を表す「be 動詞 [に該当するもの]」がないことに注意しなければならない。動詞と名詞から成立しているが、明らかに両方とも同じ対象を示している。

問題はさらにある。もしカーラカが「実行者」を意味するならば、カルトゥリ（行為主体）と同義であり、他のカーラカは不要になる。バルトリハリ（450年）は次の方法でこの問題を回避する。カーラカを表すすべての要素は、ある意味、主行為の完成に向かって何らかの機能を果たしている。デーヴァダッタが料理しているとき、料理という主行為は一定の時間に渡る一連の作用である。まきは調理のために燃え、鍋は調理される米の容器となり、米粒は調理過程において柔らかく煮える。それ故に、大まかに捉えると、それら（まき、鍋、米粒）はすべて行為主体として機能している³⁵⁾。すなわち行為者性によって特徴づけられているのだ。ただ、主行為の完成に向かって果たすそれぞれの役割および機能の違いを考えると、それぞれをカラナ（手段）と呼んだり、アディカラナ（基体）と呼んだり、カルマン（対象）と呼ぶ（Bhartṛhari, III. 7. 18）。

カーラカを単に行為を生み出す要素と定義するならば、その意味論的側面を強調することになり、行為動詞と（統語的に）結びつけられるものと定義するならば、その統語論的もしくは文法機能面を強調することになる。しかし、これらの定義はいずれも批判されている。行為とカーラカとの間の因果関係³⁶⁾は広義に捉えられるべきであり、その結果、直接的な関係と間接的あるいは「連鎖的」な関係の両方が含まなければならない。そうでなければ、行為主体あるいは手段のみがカーラカと呼ばれることになる。サンブラダーナ（受益者・受領者。西洋文法における与格）やアパーダーナ（固定の出発点。西洋文法における奪格）は間接的に行為に寄与しているに過ぎない。ただし、因果関係の概念を広くとり、直接のおよび間接的関係の両方を含めてしまうと、是認し得ないことが出てきて、アティヴヤープタ（ativyāpta）である。カーラカに関しては、西洋の格文法とは相容れない独特な考え方がもう1つある。いわゆる属格（パーニニ文法の術語では「シェーシャ」すなわち残余 [の関係]）はカーラカではない³⁷⁾。この点について説明することで、カーラカの内容がさらに明らかになる。カーラカはドラヴァ（実体）と行為との関係を強調している。シェーシャはドラヴァとドラヴァの関係である。たとえば、「チャイトラの富」や「チャイトラの息子」のように、所有性あるいは親性という関係である³⁸⁾。ここで注意すべきは、カーラカとの対比におけるシェーシャと、どちらの関係も表す第6格語尾（ṣaṣṭhī vibhakti）である。たとえば、「Rāmasya putraḥ」（ラーマの息子）の場合、第6格語尾³⁹⁾はシェーシャ関係を表している。他方、「Rāmasya gamanam」（ラーマが行くこと）や「jalasya pānam」⁴⁰⁾（水を飲むこと）

の場合、第6格語尾はカーラカ関係を表しており、前者はラーマの行為主体性を表し、後者は水の対象性を表している。ここでは使用に厳密さがない。さらに、話者が特定のカーラカ関係ではなく、単に一般的なカーラカ関係を強調したいとき、たとえばカルマン（対象）を表すのに第6格語尾が使われたりする⁴¹⁾。いずれにしろ、シェーシャ関係とカーラカ関係のいずれも第6格語尾で表現されるとしても、この2つの関係は区別すべきとの理解は共有されている。統語の視点からみると、シェーシャ関係を表すために第6格語尾が求められ、名詞あるいは代名詞同士を結びつける。しかし、カーラカ関係を表す場合、第6格語尾が求められるのは動詞に名詞あるいは代名詞を結びつけるときである。

上記の広義の解釈については次のように説明できるであろう。たとえば、「Caitrasya taṇḍulam pacati」（チャイトラの米を調理する）では、チャイトラはいかなるカーラカにも分類されない。チャイトラはシェーシャ（残余）である。しかし、少し巧妙に考えれば、チャイトラと〔行為である〕調理との間に広義の因果関係の適用を主張することができる。すなわち、チャイトラがカーラカでなければ⁴²⁾、調理人はチャイトラの米を調理できないではないか（たとえば、チャイトラは米の所有者で、〔調理人である彼に〕調理の許可を与えたのかもしれない、といった関係が想定される）。このようになると、因果関係に基づく定義は広すぎる。あるいは、チャイトラは動詞形式の「pacati」と統語上で直接結びついていない、すなわちアヌヴィタ（anvita）ではないので、統語的関連性に基づく2つ目の定義には過失がないと言えるか。そうではない。カーラカの説明に「直接的な統語関係」を含めることはできない。パーニニのP.2.3.51～P.2.3.56⁴³⁾の規則では、カルマンやカラナのような特定のカーラカが非カーラカであるシェーシャに変換される条件（統語など）が述べられている。たとえば「mātuḥ smarati」⁴⁴⁾（母を覚えている）と「sarpiṣo jānīte」⁴⁵⁾（ギーであるかのように儀式を行う）の場合、母（mātr̥）やギー（sarpis）を意味する語は、それぞれの動詞と直接の統語関係がある。しかし、〔パーニニのP.2.3.51～P.2.3.56の規則にしたがい〕両方ともシェーシャ、すなわち非カーラカと理解され、それ故に第6格語尾で表されている。「直接」という語によって統語関係を示す場合、重複は避けられない。他方、「直接」という表現の代わりに、「直接または間接」とも「統語関係がない」とも述べることもできない。「Rāmasya putram abhivādayate」（ラーマの息子を歓迎する）の場合、第6格語尾で表される「Rāmasya」（ラーマの）は、少なくとも息子を表す語「putram」を通して動詞と間接的に結びついているからである。これは広義の解釈の異なる例である。この場合の「Rāma」は非カーラカであり、シェーシャに分類される。

IV

15・16世紀の新ニヤーヤ学派は、この問題から逃れる方法を考案した。バヴァーナン

ダ⁴⁶⁾に従い説明しよう。カーラカとは、一次的意味と二次的意味の両方において、「ヴィバクティ」(いわゆる格語尾)の意味を介して行為動詞と統語的に結びつけられるもの(アヌヴァイン)と理解されるべきである。つまり、それぞれのカーラカのカテゴリーは、意味と文法上の接尾辞との媒介者であることは明らかである。バヴァーナダによれば、一次的カーラカとは行為の完成に明確に寄与する要素であり、ヴィバクティの意味を介して動詞形式と統語的に結びつく。二次的な場合、様々な統語上および他の判断事項によってカーラカのカテゴリーが決まる。たとえば「cakṣuṣā paśyati⁴⁷⁾(眼で見る)の場合、眼(cakṣus)は行為完成に明らかに寄与している。それに対して「ghaṭam jānāti(壺を知っている)の場合、見方によっては、壺(ghaṭa)は厳密には認識を生み出す要素とはならないかもしれない。すくなくとも、統語的に行為動詞と結びついているということはでき、第2格語尾の「-am」の意味が媒介者である⁴⁸⁾。

「格語尾の意味を媒介者として」との条件を加えた理由は全く明らかではない。バヴァーナダは、この条件により、副詞との重複が避けられると信じていた。たとえば「stokam⁴⁹⁾ pacati」((彼は)少しだけ料理をする)の場合、「stoka」は第2格語尾「-am」をとっているが、このような副詞的な接辞は何も意味を表さないとする考えもある。単に語幹を有用なパダ(語)に変えるために使われているに過ぎない⁵⁰⁾。故に、バヴァーナダの示した条件は、副詞をカーラカから除外するために必要である。他方、副詞は形容詞もしくは動詞の限定詞として扱われるべきとの考えもある。副詞的接辞は同一関係(アベダ)を表示し、限定されるものと同一である。そうすると、形容詞のような副詞はカーラカとして扱われる。すると、[副詞を除外するための]先ほどの条件は必要とされない。また別の考えでは、バヴァーナダの示した条件はクリティ(kṛti)すなわち努力・意欲を除外するために必要である。そうでなければ動詞語尾の意味としての「クリティ」は[カーラカの]定義の中に含まれてしまうというのがニヤーヤ学派の考えである⁵¹⁾。いずれにしろ、バヴァーナダの提示した条件をうまく説明することは難しい。

カーラカを定義する主目的は、非カーラカを除外することである。非カーラカはシェーシャ(残余)と呼ばれ、通常第6格語尾で表される。統語的には、シェーシャを表す語、より正確に言えば第6格語尾が添えられる語も動詞形式と結びついている。たとえば「Caitrasya pacati」(チャイトラの(米を)調理する)の例が示している。そのうえで、バヴァーナダは最終的に次のように結論づけている。「『カーラカ』とは、行為動詞と統語的に結びついたもの(アヌヴァイタ)であり、次の6つの性質あるいは力のいずれかが与えられている。すなわち、行為主体性、対象性、手段性、受益者性、出発点性、そして基体性である。」ここで重要な術語は「アヌヴァヤ」(anvaya)である。この術語には曖昧な使われ方があるが、文法あるいは統語上の項目同士の統語関係を表すと理解している。と同時に、文法

と他の項目の意味の関係も表すかもしれない。名詞語幹の動詞形式に対する統語関係を強調したくない場合、非カーラカの関係が選択される。たとえば「*daṇḍena ghaṭaḥ*」(棒によって壺は(作られる))では、行為を表す動詞との明示的關係がないため、棒 (*daṇḍa*) は単に「ヘートウ」(*hetu*) すなわち原因と呼ばれ、カーラカとはみなされない。パーニニは、P.2.3.23において、第3格語尾を特別に説明している⁵²⁾。他方、「*daṇḍena ghaṭaḥ kṛtaḥ*」(棒によって壺は作られた)のように、動詞との統語関係が明確に示されている場合、手段性という関係は第3格語尾で表現されるとの通常の規則にしたがい、棒はカーラカとなり、カラナを表す。

パーニニに限らず、母語話者もカーラカ概念を理解していたと考えられる。しかし、カーラカを定義したり、ラクシャナ (*lakṣaṇa*)、すなわち6種がよく知られたカーラカのみある特別な徴候を特定することはほぼ不可能である。この直感的なものを説明するために様々な説明が試みられてきたが、全く成功していない。バヴァーナンダが最終的に到達した結論では、まず6種のカーラカの力を個別に挙げ、そのいずれについてもカーラカの術語を使う根拠(ニミッタ)があることを述べる。哲学において、これらの6種の力をカーラカという表題の下にまとめることができる、と直感的に述べることは珍しいことではない。だが、広義の解釈や狭義の解釈に決して陥らないように、この直感を完全に誤りなく説明し、論理的に定義することは難しい。それでも、さまざまな定義を立て、それらを検証しようとする試みから、カーラカとは何かについての考えを導き出すことはできるであろう。

翻訳註

- 1) ヴァラダラージャ (17世紀) 著。パーニニのストトラの最も基本的な規則 (約1,300のストトラ) が解説されている。詳細は高崎 [1959]。
- 2) 知的活動に精通した職能人 (フィリオザ [2006])。
- 3) “Dictionary of Pāṇinian Grammatical Terminology” (Roodbergen [2008]) では、『マハーバーシュヤ』(パーニニの『アシュターディーヤーイー』とカーティヤーヤナの『ヴァールッティカ』)に対する補注・注釈に言及し、「*kriyā*」(クリヤー)とは「action (as the meaning of a verbal base)」である。たとえば、「*ṭhā*」(努力)、「*ceṣṭā*」(動き)、「*vyāpāra*」(諸々の活動)による。
- 4) 「P」は『アシュターディーヤーイー』すなわち『パーニニ・ストトラ』を表す。アディヤーヤ(巻)、パーダ(章)、ストトラ(規則)から構成されている。そして規則は大きく4種類に分けられる。すなわちサムジュニヤー(定義)、パリパーシャー(メタ規則)、アディカーラ(表題)、そしてヴリッティ(操作規則)である。

P.1.4.23は『アシュターディーヤーイー』の1巻、4章、23規則で参照される。P.1.4.23 *kārake* とは「カーラカのもとに」という表題規則であり、これ以降の規則で6つのカテゴリーが述べられる。問われるのは、なぜ「*kārake*」と第7格語尾で述べられているか。複数の解釈があり、

論ぜられてきた。詳細については, Sharma [1990: 229–234], Cardona [1997] を参照。

- 5) P.1.4.24 *dhravam apāye'pādānam* 「分離における固定点はアパーダーナである」。第 5 格語尾で表現する。
- 6) P.1.4.32 *karmanā yam abhipraiti sa sampradānam* 「行為の受益者・受領者はサンプラダーナである」。第 4 格語尾で表現する。
- 7) P.1.4.42 *sādhakatamaṃ karaṇam* 「特に行為の完成をもたらす手段はカラナである」。第 3 格語尾で表現する。
- 8) P.1.4.45 *ādhāro'dhikaraṇam* 「行為の基体はアディカラナである」。第 7 格語尾で表現する。
- 9) P.1.4.49 *kartur īpsitatamaṃ karma* 「行為主体が最も求めるもの・目的・対象はカルマンである」。第 2 格語尾で表現する。
- 10) P.1.4.54 *svatantraḥ kartā* 「行為に対して独立している・非依存的であるものはカルトゥリである」。第 1 格語尾で表現する。
- 11) 規則の順番については Sharma [1990: 234] を参照。
- 12) カーラカを西洋文法機能に対応させるのは危険である (Ganeri [2006])。パーニニ文法学では数字を使って名詞の格語尾を表している。すなわち, 第 1 格語尾～第 8 格語尾と呼び, 主格～呼格という表現を使わない。数字で表すことによりカーラカの意味的役割と混同せずに済む。たとえばサンスクリット文において, 行為主体は動詞語尾で表現され, 第 1 格名詞と同一関係にある。また, 名詞と名詞が並列されている場合, いずれかの名詞は述語を表している。第 6 格語尾についても注意が必要である。あえて他の印欧語の格の呼び方と対応させるならば属格となろう。しかし, 属格は所属や所有の関係を表すが, サンスクリット語の第 6 格語尾は非カーラカの所有関係を表す場合と動詞で表現される行為に寄与する要素としてのカーラカ関係を表す場合がある。後者の場合, 「属格」という術語を使うのは不適切である。
- 13) 原文では, カラナ, アディカラナ, カルマン, カルトゥリについて, 順に具格, 処格, 対格, 主格と括弧内に対応表現を示しているが, アパーダーナとサンプラダーナについては載せていない。
- 14) 原文は「action」。カーラカを「行為を完成させるもの」, 「行為や動作の実現に役立つもの」と理解する前提上, 基本的に「行為」と訳している。しかし, のちに説明されるように, パーニニはカルトゥリのカテゴリーについて, 生物と非生物とを区別していない。文脈により「動作」「動き」と訳した方が自然な場合がある。
- 15) 原文では 6 つのカーラカカテゴリーを紹介する際, カルトゥリを「agent」と括弧内で説明している。そして, 当該箇所では「the leaf is the agent」と英訳されている。すると「葉」はカルトゥリとなる。他方, P.1.4.54 は「行為に対して独立している・非依存的であるカーラカはカルトゥリである」という規則である。この規則では, カルトゥリは他のカーラカの関与に依存する必要がない, と述べられている。たとえば「*devadattaḥ sthālyāṃ pacaty odanam agninā*」(デーヴァダッタは鍋で火を使ってポリッジを料理する) の場合, 基体のアディカラナ(「*sthālyāṃ*」は第 7 格語尾を持つ), 対象のカルマン(「*odanam*」は第 2 格語尾を持つ), 手段のカラナ(「*agninā*」は第 3 格語尾を持つ) はあくまで行為完成に寄与する役割がある。他方, 行為主体無くしていかなる行為も完成しないということからも, カルトゥリの非依存性・独立性が示される (Sharma [1990: 268–270])。また, 動詞「*pacaty*」の語尾「*-ti*」がカーラカを表している(この場合はカルトゥリ)。動詞語尾はプラトヤヤと呼ばれ, 条件や因果関係を示す。

第2章にあるように、動詞語尾は行為主体が動作完成という結果をもたらす因子であることをすでに示していると考えられる(加藤 [2015])。また、能動態文ならば、動詞語尾はカルトゥリを表し、受動態文ならばカルマンを表すとも説明できる。したがって実際の間人であるデーヴァダッタとカルトゥリの関係はアベダ (abheda) すなわち同一関係である。P.2.3.46 *prātipadikārthalingaparimānavacanamātre prathamā* と述べられるように、第1格語尾は、名詞の語幹の意味のみ、性のみ、量のみ、あるいは数のみが表示される時に導入される。

では、動詞語尾がカーラカを表しているのならば、語根の意味は何か。次のように説明される(Sharma [ibid: 254])。文法学において動詞の語根は2つのもの・ことを意味する。すなわち、行為完成過程の諸々の活動である「ヴァーパーラ」(vyāpāra) と行為の結果である「バラ」(phala) である。前者は完成されるべきもの・ことである「サードヤ」(sādhyā) と呼ばれ、後者は完成されたもの・ことである「シッドダ」(siddha) と呼ばれる。たとえば他動詞の語根で表される行為においては、カルトゥリはヴァーパーラの存在する基体とみなされる。対して、カルマンはバラの基体とみなされる。

後半にバーヴァーナナダ(新ニヤーヤ学派)の見解が述べられるが、文法学派との比較において他学派(ニヤーヤ学派や新ニヤーヤ学派)の行為主体概念については、Matilal [1991], 工藤 [1997] を参照されたい。

- 16) 「vr̥kṣāt parṇam bhūmau patati」のカーラカと対応する文法機能は以下のように説明される。アパーダーナは落下の出発点である木であり、「vr̥kṣāt」と表現される(男性名詞「vr̥kṣa」の単数形、第5格語尾を持つ)。アディカラナは落下の基体である地面であり、「bhūmau」と表現される(男性名詞「bhūmi」の単数形、第7格語尾を持つ)。行為主体は「parṇam」(中性名詞「parṇa」の単数形、第1格語尾を持つ)と表現される(P.2.3.46)。カルトゥリは語根「pat」の3人称、単数、現在形の語尾「-ti」で表現され、「patati」となる。
- 17) 「rājā viprāya sva-hastena dhanam dadāti」のカーラカと対応する文法機能は以下のように説明される。行為主体は「rājā」(男性名詞「rājan」の第1格語尾を持つ)と表現される。サンプラダーナは「viprāya」(形容詞「vipra」の第4格語尾を持つ)、カラナは「sva-hastena」(男性名詞「sva-hasta」の第3格語尾を持つ)、カルマンは「dhanam」(中性名詞「dhana」の第2格語尾を持つ)と表現される。カルトゥリは語根「dā」の3人称、単数、現在形の語尾「-ti」で表現され、「dadāti」となる。
- 18) P.1.4.46 *adhiśīnsthāsām karma* 「adhiが動詞『śī』、動詞『sthā』、動詞『ās』の前に付加されると、基体を表すカーラカはカルマンである」
- 19) 加藤 [2016] を参照。
- 20) 事例1の「grāmam」単数形、第2格語尾を持ち、事例2の「grāme」は単数形、第7格語尾を持つ。
- 21) あえて属格に対応させるならば第6格語尾であろうが、第6格語尾はカーラカ以外の関係も表す(P.2.3.50 *śaṣṭhī śeṣe*)。たとえば、「rājñah puruṣah」(王の家来)の「rājñah」は単数形、第6格語尾を持ち、「puruṣah」との関係は所有者と被所有者である。カーラカは行為完成寄与者の役割を果たすため、この場合の第6格語尾はカーラカを表さない。
- 22) 「śabdapramāṇakāḥ」の直訳は、プラマーナ(正しい認識手段)を持つもの、それはシャブダである。

- 23) パタンジャリの『マハーバーシュヤ』の最初の章である「パスパチャー・アーフニカ」では功德とことばの知識および使用の関係が述べられている。そのなかで、「śabdapramāṇakā yayam. yac chabda āha tad asmākaṃ pramāṇam」(我々はことばの権威に従う。ことばが[何かに]言及するとき、それは我々にとって権威である)と説かれる。
- 24) 「arthapramāṇakāḥ」の直訳は、プラマーナ(正しい認識手段)を持つもの、それはアルタである。
- 25) 4～5世紀のニヤヤ学派の学匠。この派の根本經典である『ニヤヤ・ストラ』に対する『注解』を著した。
- 26) 150～250頃のナーガールジュナ(龍樹)を始祖とするインド大乘仏教の学派。その中心は空思想にある。
- 27) 6つのカテゴリーを使って、カーラカを表している。
- 28) 木がカルトゥリとされる理由は木に存在する「非依存性・独立性」、カルマンとされる理由は木に存在する「対象性・望まれている性質」、木がカラナとされる理由は木に存在する「手段性」、木がサンプラダーナとされる理由は木に存在する「受益性」、木がアパーダーナとされる理由は木に存在する「～から離反する固定地点性」、木がアディカラナとされる理由は木に存在する「基体性」であると理解され、木に存在する性質の違いがカーラカカテゴリーの違いと述べている。
- 29) Matilal [1991] を参照。
- 30) P.1.4.46 adhiśṅsthāsām karma (前掲)。
- 31) 「kārake」という規則(前掲)。
- 32) パーニニに帰せられるかどうか不明(Roodbergen [2008])。
- 33) 「gandati」は語根「gand」に3人称、単数、現在形の語尾が付いている。「kapolaṃ」は男性名詞「kapola」に単数形、第2格語尾が付いている。直訳すれば「頬を装う」となる。
- 34) ダートゥ(語根)の意味である行為が暗示されている。
- 35) 「sthālī pacati」(大釜が料理する)において、語根「pac」によって表される行為には、火をつけること、鍋を火にかけること、鍋の中身(たとえば米)を水に浸すこと、鍋の中身を調理することといった多くの動作が含まれている。行為の完成は鍋の中身の調理が完成することである。つまり、行為の完成以外の動作は補助的と考えられ、行為完成に寄与する要素である。他方、補助的動作そのものの行為主体を考えた時、火は燃焼という行為の行為主体であり、鍋は火にかかるという行為の行為主体と捉えることができる(Sharma [1990: 269])。
- 36) 行為の完成をもたらすカーラカ。
- 37) 第6格語尾使用について、パタンジャリは『マハーバーシュヤ』「パスパチャー・アーフニカ」において次のように説明する。
- atha vyākaraṇam ity asya śabdasya kaḥ padārthaḥ. sūtram. sūtre vyākaraṇe śaṣṭhyartha'nupapanaḥ. sūtre vyākaraṇe śaṣṭhyartha nopapadyate vyākaraṇasya sūtram iti. kiṃ hi tad anyat sūtrād vyākaraṇam yasyādaḥ sūtram syāt ... atha vā punar astu sūtram. nanu coktaṃ sūtre vyākaraṇe śaṣṭhyartha'nupapanna iti. naiṣa doṣaḥ. vyapadeśivadbhāvena bhaviṣyati
- (さて、文法学と[いう]このことばの意味は何か。規則である。文法学が規則ならば、第6格語尾の意味が説明されない。文法学が規則ならば『vyākaraṇasya sūtram』での第6格語尾の意味が適切でない。なぜなら、規則とは異なる他の規則の規則はあるのだろうか。(中略)あ

るいは、[文法学とは] 規則であるべき。いやそうではない、「文法学が規則ならば、第6格語尾の意味が説明されない」と[述べられた]。これは欠陥ではない。[あることばに本来は無い] 意味があるかのような存在によって[解決]するだろう)

つまり「vyākaraṇasya sūtram」の「vyākaraṇa」と「sūtra」の対象を同じとすると、第6格語尾使用が正当化されない。しかし、「vyākaraṇa」とは規則の本体であり、これによって発話が分析されるものとの意味を与えれば、問題は解決される。これが「vyapadeśivadbhāva」の表す意味である。その結果、「vyākaraṇa」と「sūtra」とは表示対象が異なることになり、第6格語尾使用が正当化される。なお、「vyapadeśivadbhāva」については、Abhyankar and Shukla [1975], Joshi and Roodbergen [1986], 和田 [1993b], Unebe [2006] に詳しい。

38) P.2.3.50 śaṣṭhī śeṣe 「残余を表す時、第6格語尾である」

「śeṣa」(残余)とはP.2.3.2 karmaṇi dvitīyā ~ P.2.3.46 prātipadikārthaliṅgaparimānavacanamātre prathamā (P.2.3.2とP.2.3.46を含む)の規定範囲以外のものであり、第6格語尾の被指示物である。たとえば「rājñah puruṣah」(王の家来)の場合、「rājñah」は単数形、第6格語尾を持ち(<男性名詞「rājan」)、「puruṣah」(男性名詞「puruṣa」の単数形、第1格名詞)との関係は所有者と被所有者である。

P.2.3.2 karmaṇi dvitīyāとは「カルマンが説明されていない時、第2格語尾である」という規則である。この規則はP.2.3.1 anabhite「他で述べられていない時」に従う。カーシカはP.2.3.1は表題規則であり、格語尾導入の際にはこの規則が必ず考慮されなければならないと述べる。P.1.4.49では、語幹に第2格語尾をつけるのはカルマンを表す時と述べられるが、P.2.3.1とP.2.3.2により、他の方法でカルマンが述べられていないという条件がつく。もしカルマンが既に述べられていたら、格語尾を使って再びカルマンを述べてはならない。このように、P.2.3.1は格語尾導入を制約する規則であり、格語尾が導入できるのは、被指示物が他の方法で述べられていない場合である。たとえば、「Devadatta odanam pacati」(デーヴァダッタはポリッジを調理する)の場合、行為に寄与するカルマンは述べられていないため、第2格語尾が「odana」に導入されている。他方、「Devadattena odanaḥ pacyate」(デーヴァダッタによってポリッジが調理される)の場合、「pacyate」(語根「pac」の受動態)の動詞語尾「-te」によってカルマンが表されているため、格語尾を使ってカルマンを再度述べることができない。なお、P.2.3.46 prātipadikārthaliṅgaparimānavacanamātre prathamāとは「第1格語尾は、名詞語幹の意味のみ、性のみ、量のみ、あるいは数のみが表示される時導入される」という規則である(Sharma [1995])。

39) 「Rāmasya」は単数形、第6格語尾を持つ(<男性名詞「Rāma」)。「putrah」は男性名詞「putra」の単数形、第1格名詞。

40) 「gamanam」について、語根「gam」(行く)にkṛt接辞の「-ana」が付いて中性名詞が作られている。「gamanam」は単数形、第1格名詞。「pānam」(語根「pā」。「飲む」という意味)も同様に分析できる。「jalasya」は中性名詞「jala」(水)に単数形、第6格語尾が付いている。

41) Vasu [1906: 365]を参照。

42) 具体的には、「チャイトラがどういわけ調理という行為に関与していなかったら」を意味している。

43) 以下、規則を説明する。

・P.2.3.51 jñō'vidarthasya karaṇe 「語根『jñā』が『知る』の意味で使われない場合、カラナは第

6 格語尾で表される」

- ・ P.2.3.52 *adhīgarthadayeśāṃ karmaṇi* 「動詞が語根『adhī』(想起する), 『day』(分配する), 『tī』(支配する)の意味で使われるとき, カルマンは第6格語尾で表される」
 - ・ P.2.3.53 *krñāḥ pratiyatne* 「何かの新しい性質が理解されるとき, 語根『kr』(する・作る)のカルマンは第6格語尾で表される」
 - ・ P.2.3.54 *rujārthānām bhāvavacanānām ajvareḥ* 「語根『jvar』を除き, 動詞が語根『ruj』(苦しめる)の意味で使われるとき, 行為主体がバーヴァを表す場合, 動詞のカルマンは第6格語尾で表される」
 - ・ P.2.3.55 *āśiṣi nāthaḥ* 「語根『nāth』が語根『āśī』(祝福する)の意味で使われるとき, カルマンは第6格語尾で表される」
 - ・ P.2.3.56 *jāsiniprahananāṭakrāthapiśāṃ himsāyām* 「語根『jas』, 動詞前綴り『ni-』や『pra-』を伴う語根『han』, 『nat』, 『krāth』, そして『pis』が『損傷する』の意味で使われるとき, カルマンは第6格語尾で表される」
- 44) 「smarati」は語根「smṛ」の3人称, 単数, 現在形であり, 「～を忘れない」という意味で使われる時, P.2.3.52の規則にしたがう。カルマンである「mātr」(母)に第6格語尾「-uḥ」が導入される。
- 45) 「jānīte」は語根「jñā」のアートマネパダ態, 3人称, 単数, 現在形である。P.2.3.51に従い, カラナである「sarpis」(ギー)に第6格語尾「-ah」が導入される。例文が「sarpīṣo」と表記されているのは, サンディ規則(連声法)によるヴィサルガ(「-h」)の処理であり, 「-ah」が有声子音の前で「-o」に交替している。
- 46) バヴァーナング・シッターンタヴァーギーシャ。新ニヤーヤ学派の学者。ベンガルにおいて16世紀頃には活躍していたと言われる。バヴァーナングの統語論概念のうち行為主体性については, 工藤 [1997] を参照。
- 47) 「cakṣus」に第3格語尾の「-ā」が添えられ (cakṣuṣā), カラナ(手段)が表される。
- 48) 「ghata」に第2格語尾「-am」が添えられている (ghaṭam)。
- 49) 「stokam」は副詞(「少しだけ」の意味)とも, 形容詞「stoka」(「少し」「小さい」の意味)に第2格語尾「-am」が添えられているとも捉えられる。サンスクリット語では形容詞の第2格単数形語尾が副詞として用いられる場合がある。その他, 男性名詞の「stoka」(「一滴」の意味)もあるが, 文脈上選択されない。
- 50) P.1.4.14 *suptīnantam padam* とは「sUP (名詞格語尾)あるいはtiN (動詞語尾)で終わる形式をパダ (pada) と呼ぶ」
- 51) ニヤーヤ学派では次の因果関係で行為が実現されると考える。すなわち「認識」(jñāna) → 欲求 (icchā) → 努力 (prayatna, yatna) → 行為 (kriyā)。その中の「努力」と「意欲」(kṛti)は同じ意味で使用され, 動詞語尾で表現される。たとえば「caitrah pacati」という表現において, ニヤーヤ学派は動詞語尾の「-ti」はチャイトラに存在している努力を表していると考え。文法学派の考え方については前述している。詳細は和田 [1990; 1993a; 1993b], 工藤 [1997], Wada [2006]。
- 52) P.2.3.23 *hetau* 「原因を表す時, 第3格語尾が現れる」。この場合の「ヘートウ」(hetu)は一般的な意味における「原因」を表し, 術語ではない。

原典文献

以下、具体的に言及されている文献のみを掲げる。表記は原典の形式に従う。

Cardona, George. *Pāṇini: A Survey of Research*, Mouton & Co., The Hague and Paris, 1976.

Staal, J. F. (ed.). *A Reader on the Sanskrit Grammarians*, M.I.T. Press, Cambridge (Mass.) 1972.

Whitney, W. D. ‘On Recent Studies in Hindu Grammar’, *American Journal of Philosophy*, Vol. 14, 171–97, 1893, reprinted in Staal (1972).

翻訳参考文献

1) 英文

Abhyankar, K. V. and M. Shukla (eds.) (1975). *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Āhnikas 1–3 with English Translation and Notes*. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Ballantyne J. R. (1891). *Laghukaumudī of Varadarāja*. Varanasi: Motilal Banarsidass.

Cardona, G. (1997). *Pāṇini: His Work and its Traditions—Volume One Background and Introduction*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Coward, H. G. and Kunjunni Raja (eds.) (1990). *Encyclopedia of Indian Philosophies: Volume V. The Philosophy of the Grammarians*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Ganeri, J. (2006). *Artha—Meaning*. New Delhi: OUP.

Joshi, S. D. and J. A. F. Roodbergen. (1986). *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya, Paspāśāhnika: Introduction, Text, Translation and Notes*. Pune: University of Pune.

Kudo, N. (1995). “The Notion of *Kāra* Discussed by the Grammarians,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 44 (1): 480–484.

Matilal, B. K. (1991). “Bhavānanda on “What is *Kāra*?”,” in M. M. Deshpande and S. Bhatte (eds.), *Pāṇinian Studies: Professor S. D. Joshi Felicitation Volume*, USA: Center for South and Southeast Asian Studies, The University of Michigan, pp. 263–282.

Roodbergen, J. A. F. (2008). *Dictionary of Pāṇinian Grammatical Terminology*. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Sharma, R. N. (1990). *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini—Volume II English Translation of Adhyāya One with Sanskrit Text, Transliteration, Word-Boundary, Anuvṛtti, Vṛtti, Explanatory Notes, Derivational History of Examples and Indices*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.

Sharma, R. N. (1995). *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini—Volume III English Translation of Adhyāyas Two and Three with Sanskrit Text, Transliteration, Word-Boundary, Anuvṛtti, Vṛtti, Explanatory Notes, Derivational History of Examples and Indices*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.

Sharma, R. N. (2002). *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini—Volume I Introduction to the Aṣṭādhyāyī as a Grammatical Device*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.

Unebe, T. (2006). “Inference Based on Vyapadeśa: Bhartṛhari's Remark and Related Discussions in Nyāya and Buddhist Treatises,” in M. Banerjee, U. Jha, T. Wada, N. Kulkarni and A. R. Mishra (eds.), *Nyāya-Vasiṣṭha: Felicitation Volume of Prof. V. N. Jha*. Kolkata: Sanskrit Pustak Bhandar, pp. 478–495.

- Vasu, Ś. C. (1906). *The Siddhānta Kaumudī of Bhaṭṭoji Dīkṣita—Volume I*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Wada, T. (2006). “A Navya-nyāya Presupposition in Determining the Meaning of Words.” *ACTA ASIATICA: Bulletin of The Institute of Eastern Culture, Word and Meaning in Indian Philosophy*. 90: 71–91.

2) 和文

- ピアルドー, マドレーヌ (1987) 「インドの言語理論」(高島淳訳), ジュリア・クリステヴァ編著『記号の横断』せりか書房, pp. 143–194.
- フィリオザ, ピエール=シルヴァン (2006) 『サンスクリット』(竹内信夫訳) 文庫クセジュ, 白水社.
- 加藤普由子 (2015) 「ことばと世界」『言語と文化』愛知大学語学教育研究室 32: 135–153.
- 加藤普由子 (2016) 「ことばと世界 (2)」『言語と文化』愛知大学語学教育研究室 35: 135–155.
- 工藤順之 (1997) 「新論理学派の行為主体性 (kartṛtva) 定義—バヴァーナンダ・シッターンタヴァーギーシャ『カーラカ・チャクラ (Kārakacakra)』第2節—」『佛教大学仏教学会紀要』5: 29–74.
- マルティネ, アンドレ編著 (1972) 『言語学事典 現代言語学—基本概念51章—』(三宅徳嘉監訳) 大修館書店.
- 小川英世 (1991) 「*Gamyate, Gamyamāna, Gata, Agata* — 『中論』 II, kk. 1–6の一考察—」『印度學佛教學研究』39 (2): 883–887.
- 小川英世 (1996) 「新文法学派における Kāraka 理論の研究」平成7年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書.
- 菅沼晃 (1995) 「第1格の意味—Siddhāntakaumudī, Kāraprakarana 訳註(1)—」『東洋学論叢』28.
- 高崎直道 (1959) 「サンスクリット文法(パーニニ・スートラ)への手引き—LAGHU-SIDDHĀNTA-KAUMUDĪ—」『駒澤大學研究紀要』17: 17–30.
- 和田壽弘 (1990) 「インド哲学における言語分析(1)」『名古屋大学文学部研究論集』108 哲学 36: 73–92.
- 和田壽弘 (1993a) 「インド哲学における言語分析(2)—Nyāyasiddhāntamuktāvalī「言語論の章」和訳研究—」『インド学密教学研究』宮坂宥勝博士古稀記念論集, 法蔵館, pp. 265–283.
- 和田壽弘 (1993b) 「インド哲学における言語分析(3)—Nyāyasiddhāntamuktāvalī「言語論の章」和訳研究—」『名古屋大学文学部研究論集』117 哲学 39: 17–33.